浩々洞における浄土
—「共同体」による経文解釈に着目して—

第１回　「浩々洞註」とは何か

親鸞仏教センター常勤研究員
谷釜智洋

はじめに——公開講座１月（谷釜）にあたって

趣旨

雑誌『精神界』は、清沢満之を中心とした信仰の「共同体」——浩々洞が母体となり発行された。同誌には経文解釈の連載があるが、そこには個々人の名ではなく「浩々洞註」という名のりがみられる。
本講座では『精神界』に掲載された経文解釈の論稿から浩々洞という「共同体」による浄土の捉え方に迫っていく。

→具体的にいえば、本講座の目的は、雑誌『精神界』誌上に「浩々洞註」という共同体の名前で公開された諸論稿すなわち「浄土三部経」の経文解釈から、浄土の捉え方に迫っていく。その中でも『仏説阿弥陀経』の解釈をした論稿を取り上げる。

第１回目の講座は、全体のイントロダクションを兼ねている。まずは「浩々洞註」記名の論考が収録された『精神界』とその発行母体である浩々洞について概説する。次に講座で取り上げる「浩々洞註」という記名の論稿とは誌上にどのように位置づけられるものであったのか確かめたい。

更に創刊号に「浩々洞註」として掲げられた「光明摂取の文」をとりあげ、雑誌を介して共同体の名のりで発信した主張を確かめたていきたい。従って第２回・３回から『仏説阿弥陀経』の文言を解釈した論稿を取り上げていく。

１　雑誌『精神界』と浩々洞

１－１　雑誌『精神界』について

（１）雑誌『精神界』書誌情報

・発行期間：明治 34［1901］年 1 月～大正 8［1919］年 2 月までの期間発行された仏教系の月刊誌。全 213 冊刊行
・発行部数：諸説あり(1000～3000 部か)
・歴代の編集責任者：暁烏敏・金子大榮・曽我量深
・発行元：浩々洞―ただし大正 6［1917］年以降の『精神界』には発行元に浩々洞の名が冠されなくなる。

１－２　清沢満之と浩々洞

（１）西村見暁『清沢満之先生』(昭和 26[1951]年)、法藏館

> 当時清沢先生は、近角常観氏が政教問題視察のために洋行せられたあとを託されて、同氏の学生寄宿をあずかつておられた。本郷森川町一番地にあつて中学生が十余名居た。それに大学建築係の月見覚了氏、先生の侍者原子広宣氏が居られた。そこへ暁烏・多田・佐々木の三氏が同居されることになつたのである。
>
> （西村見暁『清沢満之先生』、283 頁）

・浩々洞という名称の由来については次のように伝えられている。

（２）暁烏敏「浩々洞時代の清沢先生」『清沢満之』(昭和 3[1928]年)、観照社

> この頃、誰がいひ出したとなく、私達は手紙を書いても「清沢方」と書くのが何だか気持ちが悪いから、此処に何とかいふ名をつけたらといひ出した。よからうといふので、何といふ名にするとなると中々むづかしくなつた。そこで或日先生や月見師や私達と青年会の諸君も来て、思ひ思ひに書いて見た。そして遂に「浩々洞」という名をつけることにした。
>
> （暁烏敏「浩々洞時代の清沢先生」『清沢満之』、185 頁）

→このように「浩々洞」という名称は指導的な立場にあった清沢が命名したのではない。『暁烏敏伝』によれば、浩々洞という名称は同人たちがそれぞれ思案したものを投票し、月見覚了（1864－1923)の案が採用されたという。

・宮城顗氏はこの浩々洞という名称にかけられた思いを以下のように捉えている。

（３）宮城顗氏「浩々洞」教化研究所編『清沢満之の研究』(昭和 32[1957]年)、教化研究所

> 浩々とは、云うまでもなく、ひろびろとして大いなるさまを意味する。一切の形骸、粉飾を去つて、物そのもの、真理そのものに直入した世界、それは、一切の対立をさつた、ひろびろとした世界である。階上・階下、僅か五間の陋屋に住んで、まず浩々たらんとの願がかかげられたのである。こうして誕生した
>
> （宮城顗「浩々洞」教化研究所編『清沢満之の研究』、342～343 頁）

１－３『精神界』の世評

（１）『中央公論』「東都の宗教雑誌」（明治 34［1901］年）、反省社

> 左の十二誌を其重なるものとして読者に紹介する、曰く六合雑誌、新仏教、精神界、警世、仏教、聖書の研究、新人、通俗仏教新聞、東京毎週新誌、普通仏教、護教、基督教週報[…]
> 精神界と警世も能く相似たる雑誌なり、一は清沢満之氏の主幹、一は松村介石氏の主筆、共に一種の見地に立て世を救ひ導かんとするものも、精神界は穏健着実［…］共に主筆者の品格を想見すべし(下線部、引用者)
> （『中央公論』第 16 巻第 7 号、75～76 頁

（２）『国民年鑑』（大正 4［1914］年）、国民新聞社

「東京に於て発行せらるる主なる雑誌」宗教雑誌として、5 誌の一つに選ばれている。

（３）『教育年鑑大正七年版』（大正 6[1916]年）、冨山房

「主要なる雑誌」一覧の「宗教・文化・美術之部」欄に、宗教雑誌として 4 紙の一つとして選ばれている。

→発刊間もない時期から大正期にかけて『精神界』が世間からどのような評価を与えられていたのかが窺える。

２　「浩々洞註」とは何か

２－１　『精神界』誌上における「浩々洞註」の位置づけ

（１）「精神界」欄との関係

・『精神界』の「解釈」欄に掲げられた論稿の記名
・『精神界』「精神界」欄冒頭のエピグラフとの関係

(2)註釈に選定された経文

・収録巻号数
・収録された経文一覧
・全 24 回しか用いられない極めて特殊な記名

(3)『精神界』第2巻第11号「東京だより」

清沢満之、先般帰国致居候処、去月十七日帰洞、此度、真宗大学々監の職を退き、明日、洞を辞して、孤山に静養致すべく候

（『精神界』第 2 巻第 11 号、1902 年、44 頁）

→「浩々洞註」という記名のものと行われた経文の註釈は第 2 巻第 12 号で終了する。清沢の離洞とほぼ同時に誌面上からなくなる。逆に言えば清沢が浩々洞にあった期間は、経文を解釈するという営みが堅持されていたともいえる。

２－２　創刊号「浩々洞註」論稿

・創刊号の「誕生の辞」と「光明摂取の文」の呼応関係

(1)『精神界』創刊号「誕生の辞」(明治 34 年 1 月）

『精神界』は、何故に世に出づ(ママ)るやと問ふ者あらば、我等は反て問はむと欲す。鶴は何故に空に鳴き、鶯は何故に園に歌ふやと。
『精神界』は何故に世に出づるやと問ふ者あらば、我等は却て問はむと欲す。夏何故にさみだれ、冬何故にしぐるゝやと。
東風やはらかなる春、花ほゝえみ、西風さびしき秋、紅葉燃ゆ。竹影は階を掃ひて塵動かず。月輪は沼を穿ちて水に痕なし。
『精神界』は、謗らむか為めに、罵らむか為めに、怒らむが為めに、懲さむが為めに、世に出づるにあらず。仏の慈悲を讃めむが為めに世に出づるなり。
『精神界』は、悲まむが為めに、泣かむが為めに、争はむが為めに、叫ばんが為めに、世に出づるにあらず。仏の智慧をたゝえむが為に世に出づるなり。
苦と悲との谷を去りて、安慰と歓喜との野に遊ばむと欲する者は、ここに来れ。光明はとこしへに、こゝにましまさむ。(下線部、引用者)

（「誕生の辞」『精神界』第 1 巻第 1 号、2 頁）

→ここで言われる「光明」の見解が創刊号の浩々洞註である「光明摂取の文」に示されていると考えられる。

　このようなみたてをもって、これより「解釈」欄の「光明摂取の文」をみていきたい。まず対応関係にある創刊号のエピグラフをみてみたい。

(2)『精神界』創刊号「エピグラフ」(明治 34 年 1 月）

第一号明治三十四年一月十五日
光明遍く十方の世界を照らし、念仏の衆生を、摂取して捨てたまはず。
（仏説観無量寿経）
（『精神界』第 1 巻第 1 号、1 頁）

(3)「光明摂取の文」①

この文は、釈迦牟尼世尊か、王舎城耆闍崛山におはしける時国王の妃韋提希夫人のために説かれたる『仏説観無量寿経』の中に記されたり。而してこの文は我等人類か、罪悪と苦悩の境界を脱して、清浄安穏の楽所にいたる道を示したるもの、即ち絶待無限の光りの仏の大慈悲の広大なることを表はしたるものなり。(下線部、引用者)

（浩々洞註「光明摂取の文」『精神界』第1巻第1号、20頁上段）

(4)「光明摂取の文」②「光明」

至誠の活動たる光明は、我等の全体を養ひて飢えざらしめ、我等の全体を育てゝ発達せしめ、冷却せる我等の上に、温みを与へ、恐れあり、悲しみあり、苦しみあり、痛みある我等を護りて、勇気あらしめ、歓喜あらしめ、幸福あらしめ、安楽あらしむ。

日月の光り、電気の光り、瓦斯の光り、これ物質的の光りなり、仏教にはこれを色光と云ふ。

智慧の光り、慈悲の光り、威徳の光り、これ精神的の光なり、仏教にはこれを心光と云ふ。

我等が物を思ふ時は、我等の智慧光は物を照し。我等が、物を救ふ時には、我等の慈悲光は物に徹り、我等が我等の心を治むる時にいは、我等の威徳光は物を感動す。

永遠より永遠の末かけて闇路より闇路に迷ふ我等を救ふ御仏は光りの仏にてまします。(下線部、引用者)

浩々洞註「光明摂取の文」『精神界』第1巻第1号、20頁上段から21頁下段

(5)「偏(ママ)く十方の衆生を照じ」

然るに我等が感動せられざるは何故ぞや、我等が救はれざるは何故ぞや、我等が照されざるは何故ぞや。日月天に麗れども、盲者は之を見ざるなり、雷霆地に轟けとも、聾者はこれをきかさるなり。心の眼を開かされは、心光は見えさるなり。心の耳のふさがれるものには、徳音は聞えさるなり。(下線部、引用者)

（浩々洞註「光明摂取の文」『精神界』第1巻第1号、21頁上段～21頁下段）

(6)「光明摂取の文」③「念仏の衆生を」

念とは心の眼を開くことなり、心の耳を開くことなり。仏とは、阿弥陀仏の心の光明なり。されは念仏とは、仏を念するの謂にして、仏の心を知るの謂なり。即ち仏の心に住するの謂なり。即ち限りなき至誠の大心に**安する**の謂なり。かくの如き人、これを念仏の衆生とい云ふ。(下線部、引用者)

浩々洞註「光明摂取の文」『精神界』第1巻第1号、21頁下段

(7)「光明摂取の文」④「摂取して捨てたまはず」 1

念仏の衆生は阿弥陀仏の限りなき光明の中に包容せられて、常に彼の限りなき威徳光

の感化に浸り、混々として昼夜を捨てさる功徳の源水に愛着すへし、摂取不捨とは此境遇を云ふなり。されは摂取とは救済なり、摂理なり、おさめ、たよ(ママ)け、すくふの三義はこの二字に表はされたり。

（浩々洞註「光明摂取の文」『精神界』第1巻第1号、21頁下段～22頁上段）

（8）**「光明摂取の文」⑤「摂取して捨てたまはず」２**

信仰の眼なくして、光明を拝せざる者は、美しき仏の光を知らずと雖も、信仰の眼を得たる人は、名なき苔の面にも紫摩(ママ)黄金の聖相を拝し、いやしき蟲の羽の上にも、三十二相八十随形好の尊容を見る。この人は常に光明の園にあり、常に光明の国に住む。

（浩々洞註「光明摂取の文」『精神界』第1巻第1号、22頁下段）